

令和7年度 沖縄県教育委員会 研究指定校 1年次

# 一人一人の子供を主語にした 聴覚障害教育の質の向上を目指して

～言語力を高め、自ら思考し、豊かに学ぶための授業づくり～



## 【主題設定の理由】

中央教育審議会における答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』に「各学校段階における子供の学びの姿や教職員の姿、それを支える環境について、「こうあってほしい」という願いを含め、新学習指導要領に基づいて、一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている」とあり、答申を通して学校教育の「指導者の視点」から「学習者の視点」への再考が強調されている。また、新学習指導要領の着実な実施やICTの活用によって「一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の造り手となることができるようにすることが必要」であるともされている。

一方、聴覚障害教育を巡る状況も補聴機器や医療技術の進歩、障害の重度重複化、通信・情報機器の発展、手話言語条例を機とした社会的関心の高まり等によって多様化している。しかし、時代が変化しても、聴覚障害教育の専門性である生活や学習の基盤となる言語力やコミュニケーション能力を重視した教育実践や指導技術は、これからも継承され、発展させていくことが求められる。そのためには、こうした専門性を基にした質の高い教育活動を目指していく必要がある。

また、聴覚障害教育の在り方においても、学習者である一人一人の子供を主語に検討される必要がある。教師が授業者による授業改善の視点と学習者による学びの改善の視点を往還しながら授業を捉え、授業の中で子供一人一人の言語力や自ら思考する力を高めることは、これからの予測困難で変化の激しい社会の中で、子供たちが自ら豊かな生活や社会を作り上げていくための「生きる力」に繋がると考える。

本校は今年度より沖縄県教育委員会による研究指定校として研究を進めていく。一方、本校が主管校となる九州地区聴覚障害教育研究大会（九聴研）沖縄大会が令和8年度に開催される。そこで今年度は「一人一人の子供を主語にした聴覚障害教育の質の向上」を目指し、これまで取り組んできた幼児児童生徒のコミュニケーション力や日本語の習得、活用力の向上といった言語力を高める授業づくりとともに、子供たちが自ら課題を解決しようとしたり、学習活動を振り返って次に繋げようとしたりする中で、自ら思考する力を育むための授業改善を目指す。本研究を通して、教職員同士が実践研究を持ち寄り、協議を通して情報を共有し、課題を整理し、さらに今後の展望について協議を深めることで、聴覚障害教育に携わる教職員としての資質向上と専門性の継承発展に繋がることが期待し、研究を進めたい。

沖縄県立沖縄ろう学校

## 研究構造図

### 【学校教育目標】

聴覚に障害のある幼児児童生徒の持てる力を最大限に伸ばし、生きる力を育み、自立し社会参加できる人間を育成する。

### 【本研究が目指す幼児児童生徒の姿】

幼稚部：遊びや活動の中で、自分のやりたいことや気持ちを伝えたり、相手の気持ちを聞いたりしながら、主体的に他者と関わることができる（やりとりができる）幼児  
 小学部：学びの見通しを持ち、学習を日本語で振り返る中で自己の課題に向き合い、意欲を持って課題解決に取り組む児童  
 中学部：意味を見出して授業に向かい、新たな言葉や見方・考え方を活用して学びを言語化し、自己の変容を評価できる生徒  
 高等部：多様な視点から物事を捉え、生徒自身が課題に気づき、他者と関わりながら考え、社会の中で行動できる生徒  
 寄宿舎：卒業後の社会参加に必要な他者との深い対話の確立や自分の課題を言語化して解決に取り組める児童生徒  
 自立活動：自尊感情に支えられた障害認識のもと、日本語を使って豊かに学び続ける幼児児童生徒

### 【各研究グループの主題に迫る授業改善の手立て】

幼稚部：幼児の実態を多面的に把握する（アセスメント表の作成）  
 遊びのねらいを達成する環境設定の工夫と、遊びにおける幼児の変容や課題についての振り返り  
 小学部：各教科の理解、定着を図るための日本語文法指導の工夫  
 児童自身が見通しを持って学ぶことのできる単元構成の工夫（単元進行表の作成）  
 実態に応じて、話す振り返り・書く振り返りの設定（振り返り、振り返りシートの作成）  
 中学部：生徒が学ぶ価値を見出すことのできる単元デザイン（単元デザインシートの作成）  
 学習目標の達成に向けた、生徒が言葉を獲得し活用する力を引き出す発問や活動の工夫  
 生徒が授業における自らの変容や課題を評価できる振り返りの工夫（振り返りシート）  
 高等部：「考えさせること」を中心とした単元計画の作成（単元進行表）  
 社会的・対人的な課題に結びつけた教材構成  
 振り返りシートによる気づきや思考の可視化（振り返り・評価）  
 寄宿舎：学習会や行事の意味を理解し、社会参加に繋がるための課題解決に向けての目標設定の工夫  
 「書く」を中心とした振り返りシートの活用及び工夫  
 自立活動：発達段階に応じた言語アセスメントの取り方の検討（語彙の拡充につなげる）  
 発達段階に応じた日本語文法指導の計画表の作成と活用（日本語文法指導）  
 発達段階に応じた障害理解に関する指導計画表の作成と活用（障害理解・認識）

### 【各研究グループの研究主題】

幼稚部：一人一人の子どもの「伝え合う力」の向上を目指した授業づくり  
 小学部：個の発達に応じた言語力や自己調整力を育む授業づくり  
 中学部：生徒が学びの価値を捉え、生徒自ら学びを評価し生かすための授業改善  
 高等部：社会参加に向けた生徒が自ら考え、伝え合い、行動する力を高める授業改善  
 寄宿舎：寄宿舎生活を通じて身につく日本語力の向上を目指した取り組み  
 自立活動：発達段階に応じた言語力の育成と障害認識の深化を目指して

### 【本校の幼児児童生徒に共通する課題】

- (1) 認知能力に関すること
  - ・語彙や日本語の力が十分に育っていない
  - ・思いや考え、経験を言語化することが難しい
- (2) 非認知能力に関すること
  - ・学びに対して受身になりがち
  - ・自ら課題を見つけ、解決する姿勢が育っていない
  - ・伝え合う力が弱い、伝え合う事が難しい

## 各グループの公開授業一覧

### 幼稚部

領域	題材名	授業者
合同遊び	「新聞を使ってあそぼう」(3～5歳合同)	仲原美奈子
合同遊び	「はこであそぼう」(3～5歳合同)	玉城紘子
合同遊び	「はこであそぼう」(3～5歳合同)	照屋和代

### 小学部

学年・教科	単元名	授業者
5年国語	物語の全体像を想像し、考えたことを伝え合おう「たずねびと」	大嶺有毅
3年算数	内容A：数と計算「何倍でしょう」	伊波興穂
1年国語	おもいうかべながら よもう「くじらぐも」	田中久子

### 中学部

学年・教科	単元名	授業者
1年英語	「沖縄の有名なものを相手に伝えよう」	新崎真理子
1年数学	「未知の数の求め方を考えよう（方程式）」	饒波 寛
1年社会	「東アジアのなかの倭（縄文時代・弥生時代を眺めてみよう）」	生盛 努

### 高等部

学年・教科	単元名	授業者
1年情報	「情報の分析（表計算ソフトの利用）」	宮里 連
1年数学	「二次関数」	宮里安弘
1・3年体育	陸上競技「持久走」	呉屋 良

### 自立活動

学部・学年	単元名や題材名及び学習活動	授業者
幼稚部5歳	発音練習、気持ちの伝え方、位置の確認、絵日記発表	中村千鶴
小学部1年	名詞句づくり・複文づくり	船越裕輝
中学部1年	呼応の副詞を使って文を作ろう	新妻香織
高等部1・3年	手話の多様性と自分の受け止め方について考えよう	秋島康範



## 幼稚部グループ

# 一人一人の子どもの 「伝え合う力」の向上を目指した授業づくり ～指導と評価の一体化を通じた授業改善～

### 研究方針と取り組み内容

幼稚部では、本校の共通課題を踏まえ、幼児に育てたい力（研究の方向性）を以下のように設定した。

- ① 幼児の語彙力をもっと育てたい。
- ② 思いや考え、経験したことを言葉や身振りで表現できるようになってほしい。
- ③ 主体的に遊べるようになってほしい。
- ④ 自ら遊びを考えたり工夫したりできるようになってほしい。
- ⑤ 遊びの中で「伝えたい」気持ちを高め、伝わった経験を重ねることで、伝え合う力が育ってほしい。

これらを達成するため、以下の3つの取り組みに重点を置き、実践研究を行った。

- ① 幼児の実態を多面的に把握する。
- ② 遊びのねらいを達成するために、環境設定を工夫する。
- ③ 遊びにおける幼児の変容や課題についての振り返りを行う。

### 多面的なアセスメントを実施

#### 実践 1

幼稚部では、5月に「太田ステージ評価」「遠城寺発達検査」を実施した。2つの発達検査を実施することで発達段階を確認することができ、さらに遊びに関する発達段階（パートンの「遊びの6分類」）も合わせて確認し、アセスメント表を作成した。

アセスメントやコミュニケーション方法を基に2つのグループに分けて、設定遊びや遊びの振り返り（話し合い活動）を行った。グループを分けることで、①個々の実態に合った目標設定、②教師のかかわり方を含めた環境設定の工夫、③幼児が伝え合うための手立ての工夫、の3つにおいて、より実態に合ったアプローチができるのではないかと考えた。

令和7年度 幼稚部 アセスメント表

2025 (R7) 5月実施

	遠城寺発達検査	太田ステージ評価	遊びの6分類												
A	<table border="1"> <tr> <td>社会性</td> <td>基本的習慣</td> <td>4歳6ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>対人関係</td> <td>4歳2ヶ月</td> </tr> <tr> <td>言語</td> <td>発語</td> <td>3歳9ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>言語理解</td> <td>4歳8ヶ月</td> </tr> </table>	社会性	基本的習慣	4歳6ヶ月		対人関係	4歳2ヶ月	言語	発語	3歳9ヶ月		言語理解	4歳8ヶ月	StageIV前期	⑤連合遊び(3~4歳) →同じ遊びや道具の貸し借りはあるが、子ども同士の役割分担やルールのある遊びがあるわけではない。
社会性	基本的習慣	4歳6ヶ月													
	対人関係	4歳2ヶ月													
言語	発語	3歳9ヶ月													
	言語理解	4歳8ヶ月													
B	<table border="1"> <tr> <td>社会性</td> <td>基本的習慣</td> <td>3歳9ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>対人関係</td> <td>4歳2ヶ月</td> </tr> <tr> <td>言語</td> <td>発語</td> <td>3歳6ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>言語理解</td> <td>3歳9ヶ月</td> </tr> </table>	社会性	基本的習慣	3歳9ヶ月		対人関係	4歳2ヶ月	言語	発語	3歳6ヶ月		言語理解	3歳9ヶ月	StageIV前期	⑤連合遊び(3~4歳) →同じ遊びや道具の貸し借りはあるが、子ども同士の役割分担やルールのある遊びがあるわけではない。
社会性	基本的習慣	3歳9ヶ月													
	対人関係	4歳2ヶ月													
言語	発語	3歳6ヶ月													
	言語理解	3歳9ヶ月													
C	<table border="1"> <tr> <td>社会性</td> <td>基本的習慣</td> <td>2歳9.5ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>対人関係</td> <td>1歳9.5ヶ月</td> </tr> <tr> <td>言語</td> <td>発語</td> <td>11.5ヶ月</td> </tr> <tr> <td></td> <td>言語理解</td> <td>1歳7.5ヶ月</td> </tr> </table>	社会性	基本的習慣	2歳9.5ヶ月		対人関係	1歳9.5ヶ月	言語	発語	11.5ヶ月		言語理解	1歳7.5ヶ月	Stage I-3 →クレヨン以外に身振りあり	④平行遊び →同じような遊びをしているが、道具の貸し借りなど子ども同士の役割分担やルールのある遊びがあるわけではない。
社会性	基本的習慣	2歳9.5ヶ月													
	対人関係	1歳9.5ヶ月													
言語	発語	11.5ヶ月													
	言語理解	1歳7.5ヶ月													

#### 実践 2

### 「あそんでみよう」



今年度、1学期は「しんぶんあそび」、2学期は「はこあそび」を、全5～6時間で設定した。

・発達段階（遊びの発達段階も含む）を把握し、幼児の実態に応じた遊びを設定することで、子どもたちが主体的に遊ぶ様子がみられた。

・Aグループは、保護者（不在の場合は教師）と一緒に遊び、より安心できる環境を整えることで、遊びが広がり、その時その場所で保護者（または教師）と「楽しい気持ち」を共有する様子がみられた。

・Bグループは、当初、道具の貸し借りはあるものの一人で遊ぶことが多かったが、言葉かけ等の教師の支援や環境設定を工夫することで、友だちと関わって遊ぶ様子がみられた。「〇〇を持ってきて」「〇〇をしよう」と幼児同士のやりとりがみられ、協力して活動することができるようになってきた。



### 「はなしてみよう」

#### 実践 3

活動の後半には、グループに分かれて話し合い活動を設定し、遊びを通して楽しかったことを中心に振り返った。

・Aグループは、遊んだ場所（プレイルーム）で実際に遊んだものを使って、話し合い活動（振り返り）を行った。自分が遊んで楽しかったことを友だちに紹介し、発表の後にみんなでその遊びを体験することができた。自分の発表の順番を待ちながら、母に「発表したい！自分の番はまだ？」と聞く様子があり、「みんなに自分の遊びを伝えたい」という思いが高まる様子がみられた。

・Bグループにおいては、自分が楽しかったことの発表が中心だったが、何度か遊びを共有することを通して、他児と仲良く遊んだことを発表したり質問したりするなど、意欲的に伝え合う場面が増えてきた。



### 成果と課題

グループを2つに分けることで幼児の実態に応じた遊びを設定することができ、子どもたちが主体的に遊ぶ様子がみられ、遊びを充実させることができた。また、振り返りの場面では、やったことや気持ちを伝え合う場面を通して、「伝えた」喜びや満足感を高めることができた。課題としては、振り返りの場面において、幼児の発表を全て受け止めたいが、時間が足りず十分に受け止めることができなかった。今後は、授業の構成やまとめ方、時間の割り振り等での工夫が必要である。

## 小学部グループ

# 個の実態に応じた言語力や自己調整力を育む授業づくり

～日本語文法指導及び単元構成や振り返りの工夫を通して～

### 研究方針と取り組み内容

小学部では、本校の共通課題に対して、児童に育てたい力（研究の方向性）を以下のように設定した。

- ①児童の語彙や日本語の力を育てたい。
- ②思いや考え、経験したことを言語化できるようになってほしい。
- ③伝わる楽しさ、学ぶ面白さを実感できる成功体験を積み上げてほしい。
- ④日常生活、学校生活の中で自ら課題（問い）を見つける力を身につけてほしい。
- ⑤コミュニケーションの場を増やし、伝え合う力を高めてほしい。

これらを達成するため、3つの取り組みに重点を置き、実践研究を行った。

- ①各教科の理解定着を図るため、日本語文法指導を単元の中に位置づける。
- ②児童が見通しを持って学べるように単元進行表を作成し、児童と共有する。
- ③児童の実態に応じて、振り返り（話す・書く活動）を授業内に位置づける。

また、小学部で育てたい非認知能力を①自己管理能力、②問題解決能力、③協調性、④リーダーシップの4つに絞り、アンケートを用いた児童の自己評価を行い、実態把握を行った。

## 小5国語「おくりびと」

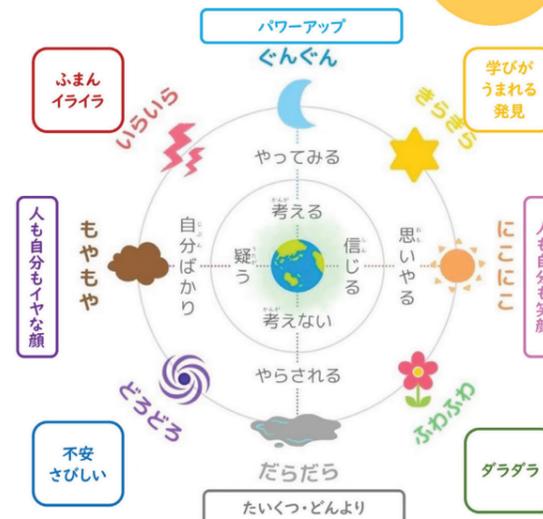
実践  
1

- 単元進行表の中に、単元内で学ぶ日本語文法指導を明記することで、導入段階で意識させることができた。また、自立活動とも連携を図って取り組むことで児童が構文（二重否定文等）を正しく理解することができた。
- 単元進行表を児童と共有することで学習の見通しを持つことができた。また、学習の見方・考え方を示すことで学ぶ視点を意識して学習に取り組むことができた。
- 振り返りシートに取り組むことで、情景描写に描かれた登場人物の心情の移り変わりを前時までの学習と比べながら考えることができた。また、考えを言語化することで児童自身が理解の深まりを確認できた。

教科書の言葉のもとに、①「綾」が戦争の事を知る前を見た「川や名前」と②知った後に見た「川や名前」の心情の変化を想像して言葉で説明することができる。	
1 質問の意味が分からない	2 質問の意味は分かるが、答えられない
3 「綾」の心情を予想し、先生と一緒に言葉で説明できる	4 「綾」の心情を想像し、日本語で説明することができる
<p>だと思ってる。</p> <p>た人達の居る前も心</p> <p>木らいつたあかい</p>	<p>静かに流れる川</p> <p>夕日を受けて赤</p> <p>光る水。この時は</p> <p>赤く光っている水</p> <p>とてなだん達</p> <p>だと思ってる。</p>
<p>知った後の川</p> <p>静かに流れる川</p> <p>夕日を受けて赤</p> <p>光る水。この時は</p> <p>赤く光っている水</p> <p>とてなだん達</p> <p>だと思ってる。</p>	<p>知った後の名前</p> <p>名前がたまたま</p> <p>名前がたまたま</p> <p>名前がたまたま</p> <p>名前がたまたま</p> <p>名前がたまたま</p>

実践  
2

## 小3算数「何倍でしょう」



「心マトリクス」を使うことで自分の状態をモニタリングできるようになってきた。

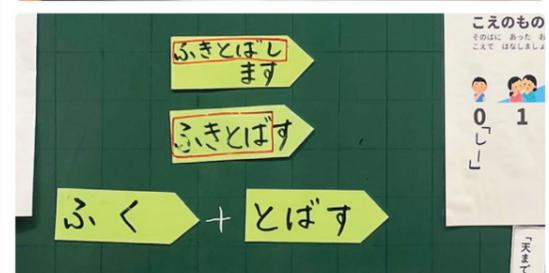
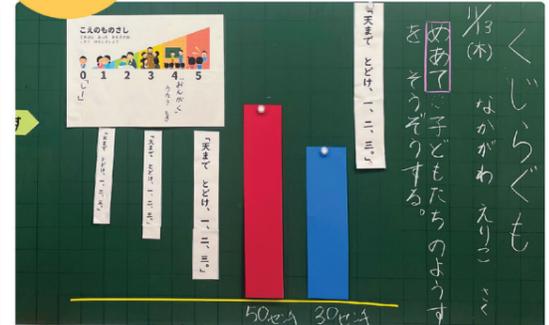
本単元は、「aのb倍のc倍」のような割合の見方・考え方の基礎となる単元である。そこで、具体物操作を通して立式したり、3つの数量関係を関係図に表したりすることで児童が抽象的な内容を捉えられるようにした。また、図の意味や立式の過程を児童に言語化させ、児童が話しながら考えを整理し、自らの考えや解き方をメタ認知的視点で捉える場面を意図的に設定した。児童は「○は△の□倍だから…」と言いながら図の関係性を言語化できた。

さらに、学習中の自分の心の状態や思考を視覚教材(左図)で確認するように促し、児童が自分自身をモニタリングしながら学べるようにした。児童からは「難しい問題だからモヤモヤゾーンにいるけど、月ゾーンに行きたい」と話すなど、自分の気持ちを客観的に捉え、切り替えようとする姿が見られた。

## 小1国語「くじらぐも」

実践  
3

本時は、雲の上に飛び乗ろうとする子ども達の高揚していく気持ちがことばに表れる場面である。そこで、①台詞に文字の大きさを選ぶ。②劇化を通し、声や手話の大きさを工夫する。という2つの手立てを設定した。また、本時の抑えたい言葉として、「ふきとばす」という動詞を取り上げた。児童たちは、声や手話を徐々に大きくするといった工夫で読むことができた。また、一瞬にしてくじらぐもへ子どもたちが「ふきとばされた」ことをほとんどの児童が理解することができた。おさえたい言葉を児童の身の回りの言葉に言い換えてイメージさせ、場面の様子を劇化、動作化し、最後に本文の言葉に戻すことで日本語の理解が深まった。さらに、劇化、動作化の様子から児童が想像の世界に入りこむ様子が見られ、言葉の理解を図る指標にもなった。



### 成果と課題

単元進行表を児童と共有したことで、児童が教科の見方・考え方や日本語文法を意識しながら学習に臨む様子が見られるようになった。また、心マトリクスの活用を通して、児童が自身の状態を他者に伝えたり、状態を良い方向へ変容させようとしたり等、自己を調整する場面が増えた。さらに振り返りを通して、児童が学習を見返す姿や、気づきを言語化する中で理解できていない点に自ら気づく姿が見られた。今後は、非認知能力アンケートの結果を分析し、児童の育てたい力は何かを再検討するとともに、児童が自らの非認知能力を高めようとする力を育む方策を検討・実践していくことで、児童の主体的な学びを促進したい。

## 中学部グループ

# 生徒が学びの価値を捉え、 生徒自ら学びを評価し生かすための授業改善 ～生徒個別の実態をふまえた単元デザインシートの作成と、 振り返りシートの活用～

### 研究方針と取り組み内容

本校の共通課題を踏まえ、中学部は以下の方向性を設定した。

- ①生徒の語彙や日本語の力をもっと育てたい。(教師の視点)
- ②生徒が学ぶことに価値を見だし、自ら学ぼうとする姿勢を育みたい。(教師の視点)
- ③生徒自ら課題を見つけ、解決しようとする姿勢を育てたい。(教師の視点)
- ④自分の気持ちや考えを相手と伝え合えるようになってほしい。(生徒の姿)
- ⑤思いや考え、経験を言語化できるようになってほしい。(生徒の姿)

この方向性に対し、学部で以下のツールを用いて授業改善を試みた。

- ①単元デザインシートの作成
- ②振り返りシートの活用
- ③チームスを共有した生徒の教科横断的な情報共有

これらの取組に教師自身が自己調整を図りながら取り組んだ。

### 単元デザインシート×公開授業

学部研究職員が12月までに各自1回以上単元デザインを行い、互いに見合うことで授業改善の推進を試みた。

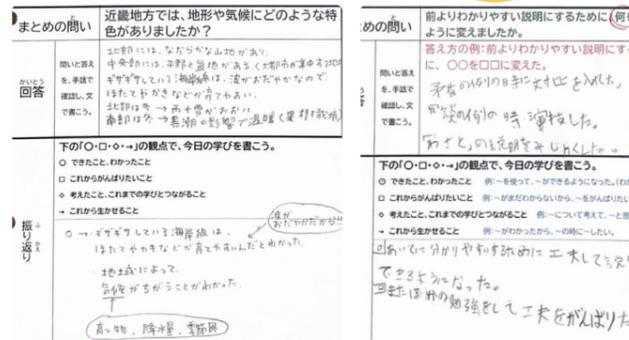
【内容】学習の主体である生徒の課題や強み、単元で習得させたい資質・能力や言葉・概念・日本語文法力、授業者が想定する生徒の学ぶ姿と変容、教科の見方・考え方を踏まえた目標や単元の中心的な問い、単元構成(主な学習活動と支援)

【効果】各教科・単元における目的や目指す生徒の学ぶ姿、それを引き出す仕掛けを意図的に授業に組み込んだ。またシートの作成や共有・改善を通して、それらを教師が授業で見取る視点を学ぶことができた。単元デザインを行った授業では、生徒が意欲的に学ぶ姿や目標を意識して試行錯誤する様子が見られた。



### 実践 2

### 振り返りシートの活用



主体的な学びを実現するために文科省や県施策で推奨されるまとめ・振り返りを「振り返りシート」で実践した。この取組には、語彙力・書記日本語力を高めるねらいもある。

振り返りシートを通して、生徒が本時や単元の学びに向き合う時間を作ることができた。また、生徒は理解したような様子に見えても、実は理解できていなかったことが実感できた。また、生徒の力量を踏まえどのような問いを設定するか、問いへの課題意識も高まった。教師が授業改善を行ううえで、振り返りをすることの重要性に気付くことができた。

生徒への効果は実態により様々である。生徒らは、まとめ・振り返りを通して学びを主体的に捉え深めたり、書記日本語トレーニングとして地道に取り組んだりすることができた。

### 生徒個別の学ぶ姿の共有(Microsoft Teams)

### 実践 3

学部研究の方向性を踏まえてMicrosoft Teamsの中学部チーム内に生徒個別の情報共有チャンネルを作成した。このチャンネルで、各生徒の振り返りシートの記入内容や学習プリントの記載内容、活動の様子や板書等の写真を共有している。

中学部は小学部までとは異なり教科担当制であり指導の系統性の担保に工夫が必要となる。この取組を通して、教師が互いの取組を共有するとともに、他教科における生徒の学ぶ姿、良さ、課題を知ることができた。また、この取組により生徒を視る目線や成長したことの喜びを共有することができた。

【挿入例】語彙力の変容の共有、生徒作品の受賞と取組共有、重複学級生徒の変容の見取りと共有、生徒が自ら手話通訳派遣申請を行う様子と取組の共有



### 成果と課題

上記3つの取組を通して、生徒の主体的な学びや資質・能力を高める授業改善について、学部職員の理解が少しずつ育まれるとともに、単元や授業に対する意識・考え方が変化したという声が挙がった。生徒が苦手とする内容にも前向きに取り組む姿や日本語を使って学びを深めようとする姿が見られる面もあった。今年度の取組で深めた授業改善の理解をもって、学部で協力して、生徒が単元の見通しをもち成長・変容の手応えを実感できるようなツールや客観的に生徒の変容を見取ることでよい方法について検討、実施していきたい。

## 高等部グループ

# 社会参加に向けた、生徒が自ら考え、 伝え合い、行動する力を高める授業改善 ～多角的思考を育む単元計画と振り返りの工夫～

### 研究方針と取り組み内容

#### 【高等部の目指す方向性】

- ① 生徒の思考や価値観の幅を広げたい。
- ② 生徒が自ら課題に気づき、行動へつなげる力を育てたい。
- ③ 思考の深まりや変容を言語化・可視化できるようにしたい。

#### 【取り組み内容】

- ① 多角的な視点に触れ、比較したり、理由を考えたりする活動を重視する。
- ② 「問い」を中心に、生徒が考え、伝え合い、行動する学びを促す。
- ③ 振り返りを通して、自分の考えや気づきを言葉で整理できるようにする。

これらの視点をふまえ、単元計画（授業計画）の工夫や振り返りの充実、対話的な活動を取り入れながら、生徒が自分の力で考え、伝え合い、行動できるようになることを目指している。

### 数学：方法を選び、理由を語る力

実践  
1

#### ■ 取り組み 『対象：高等部1年生』

自分の方法と他の方法を比較し、良い点を今後の学習に生かす活動を継続して行った。単元進行表で学習の見通しを示し、振り返りシートで目標や方法の比較を行えるよう工夫した。

#### ■ 成果

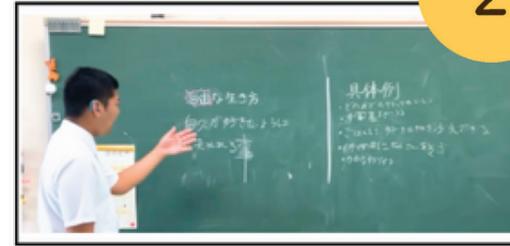
当初は教科書の方法を選ぶ傾向が強かったが、自分の方法も評価できるようになり、考え方の柔軟性や多様性への適応力の向上が確認できた。

#### ■ 今後の方向性

今後は選択した理由を論理的に生徒自身が説明する活動を充実させたい。授業時間内におさめるために内容の精選も課題である。

実践  
2

### 公共：読み取りと言語化を支える授業の工夫



#### ■ 取り組み 『対象：高等部1年生』

教科書の「理由 → 問題 → 改善 → 結果」の構造に注目し、語彙を押さえながら情報を整理して読む活動を行った。語彙と内容を結びつけて確認することで、理解のズレを防ぎ、振り返りで考えを言語化しやすくする工夫を取り入れた。

#### ■ 成果

授業で扱った語彙やキーワードを使って振り返りを書く場面が増え、問いに対して学んだ内容を整理し、自分の考えを言語化しようとする姿が見られた。

#### ■ 今後の方向性

読み取った内容を踏まえて自分の考えをより深く表現できるように、語彙の定着と内容理解をさらに支える活動を充実させたい。

実践  
3

### 情報：対話的な学びを促す環境づくり

#### ■ 取り組み 『対象：高等部1年生』

「情報1」の動画を活用し、動画を止めて問いかけを挟む対話的な学習を行った。生徒一人の授業でも、動画内の高校生の意見を手がかりに多様な視点に触れられるよう工夫した。

#### ■ 成果

動画内の高校生の意見や活動に“参加しているように”考える姿が増え、自分の考えを整理して言葉にしようとする場面が見られた。他者の意見と比べながら、自分なりの答えを持つようとする様子も見られるようになった。

#### ■ 今後の方向性

多様な教材や意見に触れながら視野を広げ、対話を通して考えを伝える力を育てたい。小さな問いの積み重ねを生かし、生徒が自信をもって意見を言える姿をめざす。



- 友達と話す方がいい
  - オンラインで普通高校と話す方がいい  
ろう人・難聴者の意見と健聴者の意見を聞きたい
  - 別の学校の様子がわかった(パソコン、iPad)  
意見の考えは同じ時も違う時があった
- 1わかって良かった

生徒の感想

【成果】職員それぞれが各教科で試行錯誤し、問いかけ方や教材の使い方を工夫して取り組むことができた。生徒にも自分の意見を求められる場面への慣れが見られ、短いながらも文章にまとめようとする姿が増えてきた。まだ不十分な表現も多いが、“自分の考えをまとめる”方向への小さな変化が見られている。職員間でも生徒の様子を共有しながら、生徒理解を深められたことも一つの成果である。

【課題】振り返りの時間確保や文章化の指導は依然として難しく、生徒が「なぜ振り返るのか」を実感しにくい場面もある。考えをまとめきれないまま終わってしまうことも多く、振り返りへの動機づけや、思考を言葉にするための具体的な支援の工夫が今後の課題となっている。

## 寄宿舎グループ

# 寄宿舎生活を通して身につく 日本語力の向上を目指した取り組み

～伝える・伝わるを意識した

行事や学習会の工夫及び振り返りシートの活用～

### 研究方針と取り組み内容

今年度、寄宿舎で生活している子どもたち（以下、舎生）は、小学部1名(女1)、中学部3名(男1、女2)、高等部3名(男2、女1)の計7名で、異年齢・一般クラス・重複クラスと実態もさまざまである。舎生の共通課題に対して「舎生の育てたい力」「寄宿舎指導員のできること」を以下のように設定した。

#### 【舎生の育てたい力】

- ①語彙力をもっと育てたい
- ②興味関心を増やしたい
- ③思いや考えを言語化できるようになってほしい
- ④課題解決できる力を身につけさせたい

#### 【寄宿舎指導員のできること】

- ①生活環境に応じた言葉かけや視覚情報の掲示
- ②興味関心が持てそうな行事や学習活動の設定
- ③伝える、伝え合う実体験の発表の場の設定
- ④行事や学習会後の振り返りの場の設定

### 実践 1 日々の日直活動

日頃の寄宿舎活動の中で「伝える・伝わる」を意識して取り組める方法として「夕べの集い」という日々の連絡会の中の「日直による1分間スピーチ」を発表方式から発表&質問方式に変更し、発表者(日直)と質問者(舎生・職員など)の言葉のキャッチボールを行うことで語彙力の向上、言語化の向上に繋がると考え、取り組みを進めることとした。

初めは職員の支援を受けて発表していた舎生も、自分一人で発表できるようになったり、発表者の話をしっかり聞ける態度の改善が見られたり、質問をきっかけに、会話のキャッチボールが見られるなど、「伝える・伝わる」からの語彙力の向上に繋がるきっかけとなった。



司会担当者

前に出て1分間スピーチを行っている様子

### 実践 2

### 県外校とのオンライン交流を通じて



通常の交流風景



フリートークの交流風景

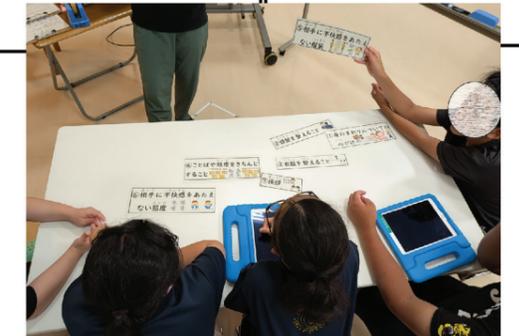
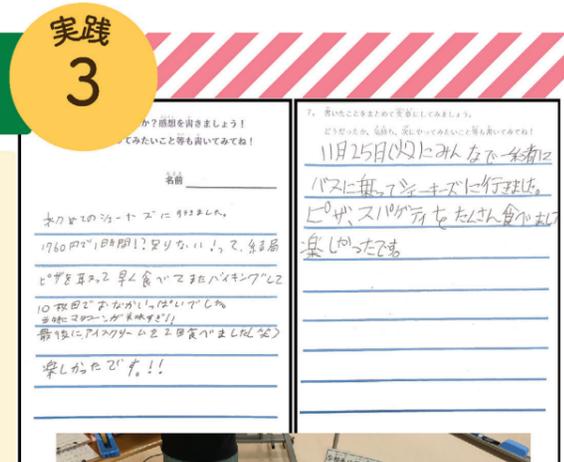
今年で5年目を迎える県外のろう学校とのオンライン交流会。舎生数の減少、同学年生も少なくなる中、県外の同学年の生徒とオンラインで繋がり、お互いの県だけで通じる手話クイズ、フリートークなどを行いながら興味関心を増やす取り組みを実施。いつもは、職員間で取り組み方法を決めて実施している交流会。今年度は、新たな試みとして、自由参加での交流を実施。何気ない会話の中から、お互いの興味関心のある会話を楽しむ中で「自分の伝えたいことが伝わった喜び」「伝わらなかった時の解決方法」などをオンライン交流の中から学ぶ様子が見られた。自分の思いや考えを伝えるためにはどうしたらよいかを自ら知る良い機会となった。何気ない日々の生徒同士のやり取りを通して、手話力向上・語彙力向上、更には課題解決するための力に繋げていきたいと考える。

### 実践 3 振り返りシートの活用

舎生の育てたい力の一つでもある「思いや考えを言語化できるようになってほしい」を実現するために、行事や学習会を通じて、自らの考えや思ったことなどをまとめるために振り返りシートを用いて取り組みを行った。振り返りシートを用いることで、行事や学習会で職員が伝えたい内容が舎生にしっかり伝わったかを知ることができ、その上で、次回の行事や学習会の内容を改善しながら取り組むためのよいきっかけとなった。舎生も書くという機会が増え、年度初めの振り返りシートの内容と比べると、書き言葉の使い方の向上や改善に繋がったと感じる。舎生の実態は様々なので、今後も個々に応じた振り返りシートの作成を行い、行事や学習会に興味を持ち参加し「思いや考えを言語化」できるよう取り組む。

#### 成果と課題

今回の取り組みを通して、振り返りシートの内容から、取り組みが良い方向に向かっていると捉えられる。日本語力向上に繋がる一つとして行事・学習会の振り返りシートの活用を今後も継続したいと考える。成果としては、職員間で舎生に対する「身につけて欲しい力」を共有し、学習会や行事に取り入れて活動していく意識改革に繋がったことが舎生の「伝える・伝わる」力の向上に繋がった。さまざまなツールを活用しながら「伝わる・伝える」の向上を目指した取り組みを継続していきたい。



# 自立活動グループ

## 発達段階に応じた言語力の育成と 障害認識の深化を目指して

～段階的な指導計画表の作成と活用を通して～

### 研究方針と取り組み内容

自活グループとして幼児児童生徒に育てたい力（研究の方向性）を下記に示す。

- ① 幼児、重複障害児の語彙力の育成。
- ② 聴覚障害児の日本語指導の積み上げと日本語力の向上。
- ③ 自己の障害について、自己肯定感を持った理解・認識の育成。

これらを達成するため、自活班を4つのグループに分け、実践研究を行う。

【語彙班】発達段階に応じた、言語アセスメントの検討と語彙獲得・拡充を目指した指導法リストの作成と活用。

【文法班】発達段階に応じた日本語文法指導の計画表の作成と活用。（JCROSS前）

【応用文法班】課題に応じた日本語文法指導のリストの作成と活用。（JCROSS後）

【障害認識班】発達段階に応じた障害理解に関する指導計画表の作成と活用、アセスメントの取り方の検討。

### 実践 1

#### 研究授業と授業検討会

- \* 対象：幼稚部5歳児1名（語彙班）
- \* 題材名「えにっきでやりとりしよう！」
  - ・日々、保護者または本人が書く絵日記を題材に言葉のやりとりをする。
- \* 本時のねらい
  - ・絵日記を題材に、幼児の体験と言葉を繋げ新たな言葉の理解と定着を促す。
- \* 授業の内容
  - ・前時で取り上げた絵日記の振り返り
  - ・新たな絵日記を読んだのやりとり
- \* 授業の振り返り
  - ・教師がわからないキャラクターについて、特徴をおさえて説明することができた。
  - うさぎみたいで、耳が黄色で身体が白。

### 取り組み 1 語彙班

- \* 対象：幼児、重複障害幼児児童生徒
- \* 目的：アセスメントに基づいた語彙拡充のための体系的・継続的な指導。
- \* 方法：発達段階に応じた言語アセスメントの検討、文法指導の前提となる語彙の選定・リスト化
- 成果：子どもの実態に応じたアセスメントの検討ができた。子どもの生活や体験に沿った語彙リスト（案）の作成ができた。
- 課題：語彙リストの検討(活用と改善)と指導法の検討

時間・日数	内容・位置	場所・施設・車
15分	挨拶	教室
15分	絵日記の振り返り	教室
15分	新しい絵日記の読み取り	教室
15分	言葉のやりとり	教室
15分	まとめ	教室
15分	挨拶	教室

### 取り組み 2 文法班

- \* 対象：JCROSS日本語理解テストで最終項目まで達していない児童(小学部低学年)
- \* 目的：年間指導計画を作成し、系統性のある指導や継続性を確保する。
- \* 方法：低学年の国語教科書から文法指導事項の選定とリスト(案)の作成
- 成果：既習項目を自活以外の場面でも児童が活用したり、見つけたりすることができた。
- 課題：小3の文法指導年間計画と教材作成が必要。



### 取り組み 3 応用文法班

- \* 対象：JCROSS日本語理解テストを全項目通過している児童生徒。
- \* 目的：聴覚障害児の学習を支える日本語文法力の向上。
- \* 方法：聴覚障害児に必要な日本語文法指導事項の選定とリスト(案)の作成。
- 成果：日本語文法指導事項の選定、リスト化(案)をすることができ、一部の内容を指導に生かすことができた。
- 課題：下記リストの活用を基にした信頼性の向上。  
リストを基にした教材作成や指導実践の研究。

レベル	品詞	呼称の副詞
Lv4-9	副詞	<input type="checkbox"/> 呼称の副詞 <input type="checkbox"/> 否定 「決して・必ずしも・少しも～ない。」 <input type="checkbox"/> 推量 「たぶん・おそらく・さぞ～でしょう。」 <input type="checkbox"/> 打消しの推量 「まさか・よもや～まい、～ない。」 <input type="checkbox"/> 仮定 「もし・たとえ・仮に・万一～たら～ても。」 <input type="checkbox"/> 比喩 「まるで・ちようど・さも・あたかも～よう。」 <input type="checkbox"/> 疑問 「なぜ・どうして・いったいなんで～か。」 <input type="checkbox"/> 依頼 「どうぞ・ぜひ・どうか・なにをぞ～くだ。」 <input type="checkbox"/> 断定 「もちろん・むろん・必ず・きつ～だ。」
Lv4-10	助動詞	<input type="checkbox"/> 「れる・られる」 <input type="checkbox"/> 尊敬・お客様が注文される、先生が質問を

#### 成果と課題

- 成果：自立活動グループとして、学部を超えてグループワーク方式で研修を進めることで、幼児児童生徒の実態が共有でき、発達段階や課題に応じた指導項目をリスト化することができた。
- 課題：指導項目のリストを活用した各学部での授業実践の積み上げと、指導の経過を見える化する工夫の検討。

### 取り組み 4 障害認識班

- \* 対象：幼児期～高校期
- \* 目的：聴覚障がい児が自らの障がい特性を正しく理解し、肯定的に受け止めながら主体的に社会生活を育む力を育てる。
- \* 方法：先行研究の整理を踏まえ、四段階に区分し、それぞれの発達に応じた目標と指導内容を体系化。
- 成果：作成した指導段階表は、教職員間の共通理解を図り、学校全体として一貫した支援が可能となるように検討している段階である。
- 課題：各段階の実践を通して、指導確認表の内容の妥当性を検討すること。

## 全体研修の取り組み

月	講師	研修テーマや形式
4月	校内職員	日本語文法指導と具体的な実践事例について（ワークショップ）
6月	東北福祉大学 大西孝志 先生	聴覚障害児童生徒の自己調整力を育む授業づくり（講話）
7月		各研究グループ 研究概要報告会（発表・協議）
8月	ちばなクリニック 石田直美 先生	聴覚障害児のことばの発達（講話）
8月	筑波技術大学元学長 大沼直紀 先生	ろう・難聴児の育ち方・学び方・生き方（講話）
8月	校内職員	VUCA時代に必要な主体性と自由進度学習の実践（ワークショップ）
11月	福岡教育大学 喜屋武睦 先生	聴覚障害児のレジリエンスを高めるために（講話）
1月	金沢大学 武居渡 先生	日本語力とセルフアドボカシー力を高める授業づくり（講話）
1月		各研究グループ 中間報告会（発表・協議）



### 【研究のまとめ】

各学部で3回の研究授業を実施し、互いの授業を見合いながら幼児児童生徒の言語力と非認知能力を高めるための授業づくりについて協議を重ねてきた。また、各学部の代表者による公開研究授業と授業研究会を行い、外部講師による指導助言をいただくことで、研究の深化や授業改善に繋がる示唆を頂いた。

小学部・中学部公開研究授業及び授業研究会（6月）：講師（大西孝志先生）によるご助言

- 自己調整力に欠かせないメタ認知の力は、言語力や言語概念の育成が大きな役割を果たす。授業の中で自己調整力を高めるためには、非認知の力と言語力をバランスよく育てていくことが重要。
- 経験したことがないことを聞いたり読んだりして想起できる力を育てていく必要がある。そのためにも、いろいろな知識を伝えていくことが大切になる。言語概念の育成力が聾学校教員の専門性になる。

幼稚部・高等部公開研究授業及び授業研究会（11月）：講師（喜屋武睦先生）によるご助言

- 成功経験だけでなく、失敗経験からどう学ぶのかということも授業の中で経験できると良い。授業の中で子どもたちが試行錯誤したり、悩んだりできる場や活動を設定できると良い。
- 聴覚障害教育において、子どもの手話や音声などの発信を教師が正しく正確に受け止め、理解し、価値付けることが聴覚障害児のレジリエンスに関わってくる。

沖縄県立沖縄ろう学校

〒901-2304

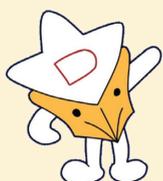
沖縄県中頭郡北中城村字屋宜原415番地

TEL：(098)932-5475

FAX：(098)932-8248

学校ホームページ

QRコード



学校マスコット  
ろーりー

学校ホームページでは、本研究の詳細や資料等を今後掲載する予定です。ぜひご覧下さい。

※本資料の無断引用、転載等の二次利用はご遠慮ください。